軍人の親　子供の経験を形成　～レジリエンスを育む～

Raised on Resiliency: How Military Parents Shape Their Child's Experiences

May 3, 2021

By Staff Sgt. Ryann Holzapfel
374th Airlift Wing Public Affairs

１４歳の時、私は少なくとも週一度、イラクに派遣に行っている父の帰りを待っている夢を見ていた。夢の中で、私は家で大興奮し、大手を広げて帰宅した父を迎えようとしていた。

父が現れると、不意に父が私に気づいていないことに気づき、時に私のことを見ぬふりをすることもあった。眠っているにも関わらず、不安が体を包んでいた。そして、心臓が痛くなるような胸の痛みを感じていた。泣いているかのように目をぎゅっと閉じて目を覚ました。そんな鮮明な夢を見て心が引き裂かれたような気持ちになったのは、父がまだ帰っておらず、憧れの人から慰めてもらうこともできなかったからだ。

軍人の子供だった私は、自身が直面していることが他の同年代の子が経験するものとは違うとは思わなかった。今や私は新米の母親であり、夫婦共に軍人だ。夫のブレンダンと私は、互いに軍人の子として全く異なる道をたどって育ったが、二人ともレジリエンスの意味を理解するようになったことは共通している。

義父は、３３年間空軍に従軍していた。最初は、言語学の空兵として入隊し、後に通信部隊に配属された。夫は幼少時代に日本、ウズベキスタン、ポルトガル、アメリカでホームスクールしたり学校に通ったりして、世界各地で生活した。義父は、現役の間、さまざまな期間に渡って派遣や出張に出ていた。夫は、幾度となく引っ越しによって住む場所が変わり、親しくなった人とも離れ離れになった。

軍人の子供としての私の生い立ちは、少し異なる。父は２８年間、陸軍の予備兵として現役および予備役の任務に就いていた。私はずっとネブラスカ州のオマハに在住していた。

父は民間の仕事をしながら、週末や長期間に訓練のために家を離れることもあった。私が生後数か月の時、父は「砂漠の嵐」に1年間、１９９６年にはコソボにも派遣されたが、私に当時の記憶はない。覚えているのは、父が１年間のローテーションで2回派遣されたことだけだ。

父が派遣されていた間は、いつもとは状況が違った。残された家族は父を恋しく思いながら、何かが足りないと言う気持ちを抱きながら生活をしていた。私たちの家族は完全ではなかった。

父が出向いた全ての場所に手紙を書いたり、ダイエットペプシと圧縮空気を詰めたケアパッケージを送るなどした。また、ウェブカメラが設置され、ピクセル数の多い画面でビデオチャットができるようになっていた赤十字のイベントに家族で出掛けたりもした。しかし、それは現在で、２０１１年にそのようなものはなかった。私たちは、普通の人がしなくてもいいようなことをしながら、父が常に私たちの生活の一部を共にしているように努めた。

長期不在の間、家族は大変な思いもしたが、普通の生活どのようなものか分からない時には、自分が置かれた状況を受け入れて進むしかない。その間、ひとり親家庭であったために、何もしなかった、何もできなかったと思ったことはない。もし、そうだったとしても、私はその記憶がないし、どんな親にとっても簡単にこなせることではない。

まさか自身が軍人の子供を持つことになるとは思ってもいなかった。私たち夫婦は、２０２０年２月に私が妊娠８週目くらいの時に横田に引っ越してきて、新しい赴任地で家族を迎えることをとても楽しみにしていた。私たちの両親にとっては、初孫だった。家族は皆、息子が産まれる時に日本に遊びに来ることを計画していたので、会わせられるのが待ちきれなかった。

そして、新型コロナウィルス感染症の流行が始まった。

私たちは家族と離れて妊娠期間を過ごした。両親にメールでで超音波の画像を送ったり、ビデオチャットで妊娠中のお腹を見せたり、バーチャル・ベビーシャワーなどもした。

初めての妊娠期間中、家族と身近に過ごせなかっただけでなく、産まれたばかりの赤ちゃんに家族が会いに来てくれる可能性もなくなっていた。

私たちは渡航制限が解除され、家族との再会できることを心待ちにしていた。しかし、その時はまだ来ていない。

息子のイライジャ・ジョン・ミラーは、2020年10月8日午前6時32分に横田基地病院で生まれた。見たことのない愛らしい子で、夫婦共に喜びに包まれたが、この幸せを分かち合えるのは自分たちの他にいなかった。ほろ苦い瞬間だった。主人と私は、産まれたばかりの赤ちゃんを家族に迎えられたことをとても幸せに思い、その喜びを最も親しい人達と分かち合いたいと思っていた。

私たち夫婦は、困難な状況に直面したが、それを乗り越えた。その時の私には気づかなかったことだ。不公平な試練の状況であったにも関わらず、私たちはそれに臆することはなかった。両親たちは私たちが知らないうちにこうした状況に何度も直面していたと思うが、子供の頃は与えられた状況をそのまま受け入れ、過ごしていた。

子供の頃に身に着いたレジリエンスは、妊娠中や出産の時にも活かされたと思っている。今では、息子の誕生は私たち夫婦だけの特別なものだと思えるのも、私たちの育った環境がそう思わせてくれるのだ。

私たちは、与えられる試練を受け止め、出来ることをして乗り越え、それを人生の経験として振り返ることを学んだ。

私たちが親になった今、息子は軍人の子になった。夫と私の軍人としての期間はあと2年だ。以前は再入隊や延長について話す時、自分たちがどうしたいかということだけを考えていたが、今は息子のことも含めて、家族全員にとって何がベストなのかを考えなくてはならない。

軍人の子供であることによって、（子供に）本当に強い基盤を築くことができるということを、これまで考えたことはなかった。軍人の子供であることで生じる試練は、沢山の良い見返りも伴う。

友達と離れても、また新しい友達ができる。慣れ親しんだ土地を離れれば、また新たな刺激的な土地を探検することができる。家族と離れ離れになると、他の軍人メンバーを通じて親しい仲間を広げる方法を学ぶ。全ての困難は、自分自身にとってプラスになるものだ。

親になってみると、軍人の子供たちが親によって形成される様子がよくわかる。子供の頃に経験したことが、親になって今までにない困難な状況に対応するための力にっていなることを有難く思っている。全ての軍人の親は、自分たちが行っている重要な仕事を知り、それが容易ではないことを理解するべきだと思う。

この記事を書いている時に、義理の母にメールをして、父についての時間軸を確認したのだが、その時、父が不在だった当時がフラッシュバックした。

父のいない生活を過ごしていたのがついこの間のように感じられ、それを思うと母として、そして妻として少し寂しくなった。私にとっては大変な事だったが、義理の母は大きな責任を背負い、よくやってくれたと思う。父はきつい仕事に就いていたが、私たち家族がそれを乗り越えるのに十分な強さを持っていると思わなければ、その道は選ばなかっただろう。

私が経験してきたように、我が子にも良い経験をさせてあげたいと願うばかりだ。両親は、軍人の子供として私の経験を形成した。当時に経験したことが、空兵、妻、母である今日の私を形作るとは思ってもいなかったが、そのことに感謝している。